



TITLE:

明末清初の東トルキスタン: その回教史的考察

AUTHOR(S):

羽田, 明

CITATION:

羽田, 明. 明末清初の東トルキスタン: その回教史的考察. 東洋史研究
1942, 7(5): 285-321

ISSUE DATE:

1942-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138846>

RIGHT:

東洋史研究

第七卷

昭和十七年十月發行

明末清初の東トルキスタン

——その回教史的考察——

羽田 明

東トルキスタンの回教化には凡そ三つの時期或は段階が認められる様である。

先づ最初オシマヤ朝、アッバス朝の迫害を避けてイラン東方の重地 マヴァール・ウンナフルに遁れたシーヤ派回教徒の中には、パミールを越えて異教徒の間に隱家を求め、或は教線擴大のための聖戰ガザト、もしくは大膽な掠奪戰を試みる者があつた。年代的には八世紀から十世紀に及ぶ間のことである。熱狂的な彼らの企圖は例外なく失敗に終つたらしいが、その悲慘な思ひ出は永く人々の記憶するところとなり、現在では全くスンニ派教徒である東トルキスタン住民もシーヤ派教主達の殉教傳説テラケルを保存してゐる。

次にはトルコ族王朝カラ・カン家又はイレク汗家の支配下に東トルキスタンが本格的回教化を開始した時期が来る。(三)天山北方の吹河畔に在つたベラサグンの町を根據とした此の王朝が、有名なサトク・ボグラ汗の改宗傳説

で知られてゐる様に、一轉して回教を奉ずることになつたのは、マヴァール・ウンナフルに據つて東方に於ける回教文化の中心勢力を形造つたイーラン族王朝サーマーン家(八九五—九九九)の影響に由ると説かれてゐるが、スンニ派回教の東トルキスタン進出は此の時代に窺まる。年代的に言へば十世紀後半に於けるカシュガル方面への侵出から、一一三二年西遼の建國に因る此の王家の滅亡まで約二世紀間である。此の東トルキスタン最初の回教王朝は、十一世紀の中葉には、天山の南麓に沿ふては龜茲を越えて東方の布古爾ブグルまで、崑崙の北麓に於ては于闐以東の車爾成綠地チルチメンに及ぶまでのタリム盆地を勢力圈内に收め、北庭(別失)、西州(高昌)を兩中心とする異教徒トルコ族ウイグル、漢史の西州回鶻や河西に據つたその同族甘州回鶻、沙州回鶻等と境を接してゐた。(三)

回教的道德書とも名附くべき侍従ユースフのクダトクウ・ビリック(一〇六九)や、最初のトルコ・アラビア辭彙であるマハムード・カシュガリのディヴァーン・ルガト・イトトルク(一〇七四年頃)は此の時期の貴重な記念物であり、一〇九六年に當る日附があるヤルカンド出土の土地賣買文書はまた當時の東トルキスタン回教化の實情を傳へる恰好の資料である。(四)

たゞ異教徒ウイグルは別としても、少くとも此の時期にカラ・カン家の勢力下に置かれた地方は完全に回教化したものと想像すれば、それは明かに早計である。マルコ・ポーロはカシュガル、ヤルカンドに於けるキリスト教徒の存在を傳へてゐるし、(五)回教徒の傳説はまた十四世紀に及んでも尙反回教的勢力が根強く殘存してゐたことを言つてゐる(六參照)。佛教徒王朝西遼の支配、その篡奪者であり、元來景教徒であつた乃蠻部酋屈出律の回教徒

壓迫、並びに之に次ぐシャマン教徒蒙古朝の君臨が種々の程度で東トルキスタン回教化の趨勢を阻止したことは疑はれない。

然るに東西トルキスタンを領有し、回教徒トルコ族住民を支配することになつた察合台汗家の蒙古族は上層階級より始めて纏てトルコ化し、回教化するに至つた。成吉思汗の札撒の忠實な遵奉者、擁護者であつた察合台の後裔諸汗は一轉してコーランの教を宣布することを以て神聖な義務と心得るに至つた。東トルキスタンの全面的回教化は多く彼らの力に俟つものであり、年代的には十四世紀の初頭から十六世紀の前半にかけて、即ち元末から明の中葉に及ぶ頃の出来事であつた。⁽²³⁾

察合台の兒孫で最初の回教信者はその曾孫に當る八剌汗^(一三六六)であつたと言はれるが、中亞の蒙古族の間で當時尙異教的勢力の方がより優勢であつたことは、彼に嗣いだ篤哇汗^(一三七一)、カバク汗^(一三八)が依然として非回教徒であつた事實によつても之を知ることができる。察合台汗家が東西に分裂したのは大體此の頃のことらしいが、回教勢力の基地であつた西部マヴァール・ウンナフルでは晩くもタルマシリン^(一三三二)以後、傳統勢力のより強かつたモグーリスタンもしくはジャタでは稍遅れてトグルク・チムール汗^(一三四七)以後、諸汗は孰れも生れながらの回教徒であり、従つて中亞の回教史を彩る改宗傳説の類はも早跡を絶つた。

トグルク・チムールが西部汗家の衰弱、内亂に乗じてマヴァール・ウンナフルを征服し一時統一政權を回復したと、而も間もなく彼の死後の混亂時代に方り、回教的、蒙古的世界帝國の建設を使命とした帖木兒が數次モグーリスタンに兵を出して之を威服したこと周知の如くである。

此の時以來察合台汗は決定的にマヴァール・ウンナフルを喪失してモグーリスタンに逼塞せざるを得なくなつたが、内紛の結果十五世紀の半にはイシククル方面を中心とするモグーリスタン本地と、別失八里を中心とするウイグリスタンの二派に分裂するに至つた。當時アルティ・シャーリ Alt-shahri 又はマンガライ・スヤ Man-

galai-Surah と呼ばれてゐた庫車以西のタリム盆地地方は蒙古族出身の有力な陪臣ドグラト家の有に歸してゐて、事實上獨立の姿を呈してゐた。トグルク・チムール汗の歿後東部汗の一族を逆弒して汗位を覗つたカマル・ウディンも此の氏族の出身であり、帖木兒の出兵は主として彼を對象としたのであつた。

モグーリスタン汗家は十六世の初頭から帖木兒朝に代つてマヴァール・ウンナフルに君臨してゐたウズベク族のシャイバン朝のために竟に一五〇二・三年頃亡された。たゞ當時最後のモグーリスタン汗ユヌースの弟に當り、アラシャ汗 Alasha 即ち「殺戮王」と綽名されたアハメッドは王統の絶えたウイグルistan汗家を嗣いでトウルファンに據つてゐたから、察合台汗家の命脈は縷の如くに續いた。アハメッドは即ち明史に見える土魯番汗阿黑麻に外ならない。これ以後別失八里のことが再び史上に現れないのは瓦剌勢力の發展に因るに相違ない。永樂朝の初めから明の封冊を受け、西北の藩屏を以て遇せられてゐた東トルキスタン東方の門戸哈密がウイグルistan汗家の有に歸したのは阿黑麻の子滿速兒汗（一五〇三年頃）の時代のことであつた。滿速兒の兄サイド汗は別にカシュガル、ヤルカンド方面に進出し、ドグラト家の藩侯を廢してカシュガル汗家を創設した。此の頃までの事情は、多少の出入はあるにせよ、明史以下の支那史料とミルザ・ハイダル（一四九九年頃）のタリキ・ラシーディとに據つてほとんど跡附け得るが、その後の諸事件は殆んど明かにし難い。兎も角もサイド汗と滿速兒汗との間には早くも嫌隙があり、サイド汗の子アブドゥル・ラシッド汗は土魯番を強襲したと云ふことであるが、結局ウイグルistan汗家はカシュガル汗家の攻勢の前に屈伏し去つたらしい。萬曆三十三、四年（一六〇五・一六〇六年）に印度から東トルキスタンを通過して支那へ入つたポルトガルの修道僧ベネディクト・ゴエスは哈密の君主がカシュガル汗の一族であつたことを明かに傳へてゐる。

かかる政治情勢の推移は回教の發展に如何なる影響を及ぼしたであらうか。

唐代摩尼教の信者であつたウイグル人が西域遷住以來佛教、景教の熱心な信者となつたことは有名な事實であるが、元代から彼らの間に已に回教勢力の浸潤を物語る史料が存在するにせよ、^(一〇) 明初の上魯番地方に佛寺が多數

に存在し、回教徒、非回教徒が混住せることは永樂十一、二年西域に使した陳誠等の紀行に見えてゐる。^(一一) シャー・

ルフ等の明に派遣した使者も等しく上魯番には佛教徒が多かつたことを傳へてゐるのである。^(一二) 従つて回教勢力の

確立は上魯番汗の支配下に於いて甫めて成つたことに相違ない。十六世紀の中葉支那を訪れたセーフィス・^(一三) は現にトゥルファンを以て回教徒の最後の町であり、支那へ向ふ隊商の集合地であると稱してゐるのである。

由來新改宗者がより熱心な信者、宣教者であることはその例が多いばかりでなく、信仰が政治的野心、經濟的欲望と結び附いた場合に於て一層左様な傾向を辿ることは古今東西軌を一にしてゐると言つてよい。宗教が言はば人間生活を全面的に規定する關係に在る回教に就いては尙更眞實である。回教を奉ずる察合台汗の末孫によつて東トルキスタンの異教文化基地ウイグリスタンが回教化されて行つた頃、カシュガル汗サイドは頻りに印度の北境や西藏にまで聖戰を企て、^(一四) コーランにその地位を保證されてゐる筈のキリスト教徒も客觀的情勢の變化と共にカシュガル、ヤルカンドから何時かその姿を消し去つた。キリスト教徒の再發見を目的に印度から遙々支那へ旅したベネディクト・ゴエスはカシュガル、ヤルカンドに於て一人のキリスト教徒も見出し得なかつたのである。^(一五)

支那貿易、交通の路線に當る哈密にも相當早くから回教徒のコロニーはあつた筈であるが、マルコ・ポーロによればカマルの住民は佛教徒であつた。^(一六) 明一統志には哈密の住民として達斡、回回、畏兀兒の三種を掲げるが、^(一七) 陳誠は蒙古、回回二種族の雜處し、衣服禮俗を異にしたことを傳へてゐる。^(一八) ブレツツシュナイダーは哈密王の稱

號威武王を畏兀兒の別譯と解してゐるが或は正しいのではあるまいか。^(二六) 兎も角も哈密の王が明初既に速檀と稱してゐたことは回教勢力の發展を證するに足るであらうが、^(二七) シャールフ等の使者の傳へるところでは哈密には壯大な佛寺と並んでデルヴィシ^(二八)即ち回教托鉢僧の僧院があつたと云ふ。^(二九) 瓦刺の勢力が加はる様になつた後、明の史料には哈密の住民として畏兀兒、哈拉灰、回回の三種が擧げられる例であるが、明實錄に據れば哈拉灰は瓦刺の種族に屬し、^(三〇) 牧畜を生業とした様である。^(三一) 天下郡國利病書に哈密城の北三十里に速卜哈拉灰、南三十里に畏兀兒把力^(三二)の地名が見えるが、夫々哈拉灰の部落、畏兀兒の城市の意に外ならない。^(三三) 嘉靖年間に及んで哈密が土魯番の回勢力に併呑されると共に畏兀兒、哈拉灰の二種は遁れて甘、肅に歸附したが、當時これらの畏兀兒人が尙佛教徒であつただらうことは胡世寧の疏に畏兀兒の官名を掲げた中に國師、僧綱司等の名稱が見えることから考へられる。^(三四) 異教徒勢力を一掃した回教勢力は僅かに哈密を併せただけでなく、明が北邊の多事に苦しんでゐたのに乘じて積極的に支那侵略の舉にさへ出た。滿速兒汗の數度に及ぶ入寇がそれであつて、明は之が對策に苦しみ朝貢貿易の好餌を以て只管懷柔に努めざるを得なかつた。^(三五) 滿速兒とはタリキ・ランディによれば「勝利者」の意である^(三六)と云ふ。その後東トルキスタン回教徒の對支攻勢が衰へたのは、察合台汗の子孫の間に葛藤が繰返されたことと明朝の懷柔策が奏効したこと等もその原因であらうが、一方では達斡勢力が甘肅を越えて青海にまで及ぶ程になつたことが重大な原因として考へられないであらうか。

東トルキスタン回教化の経緯はほど以上で明かになつたと思ふが、茲に注意すべきことは、かゝる回教勢力の發展に伴つて、俗權に對立する教權の強化され來つたことである。グルナールは十四世紀に於ける反回教的勢力の殘存—ウイギリスタンは別として—に就いて述べたジェマール・ウディンのテヅケレを紹介した後、「東トルキ

スタン回教化の完成は此のジェマール・ウディン及び彼の子アラシャド・ウディンに負ふと傳へられてゐる。民衆の宗教熱を煽り、巧みに蒙古系諸汗に取り入り、彼らにコーランの教を信ぜしめ、政治的手段によつて人民に回教を奉ぜしめるやうに説得したのは、も早會ての戰士達ではなくて神學者、僧侶であつた。右のテヅケレに據ればトグルク・チムール汗の改宗は一三五四年頃のこゝろらしいが、その孫ムハメッド汗の時代に及んで邪教殘滓は消滅した如くである。」と論じてゐる。^(三七)兎も角も回教化の完成に伴つて僧侶階級が漸次指導的役割を演ずることになり、教權が次第に俗權を左右するに至つたことは回教的觀點に立つ限り明代東トルキスタン史の著しい現象であつて、聽て明末、清初にはそれが極點に達し、カリフ帝國の消滅以來他に例のない回教神聖國家、ハルトマンの所謂 heilige Staat の出現を見るに至るのである。

二

漢唐以來漠然西域と呼び慣はされて來た東トルキスタンが清代に至つて回部、回疆と名附けられることになつたのは、恐らく清朝の征服以前に此の地方が回教神聖國家を形成してゐたためであらう。もしかかる推測が許されないにしても斯く理解することに由つて始めて回部、回疆の意味は釋然とすると云つてよいが、藩部要略^(卷十)に據れば此の回部と清朝との交渉が開けたのは順治三年^(一六六)のことであつた。此の年土魯番の蘇勒檀阿布勒阿哈默特阿濟汗 Sultan Abul-Ahmed Haji Khan が遣使入貢したから、詔して京師の會同館並びに蘭州に於て互市を許し、「大貢、小貢悉く舊例の如くすべき」旨を諭して、前代以來の關係を繼承せんとする意志を昭かにしたのである。かくて朝貢貿易を以て結ばれた清と回部との關係は聽て勃發した順治五、六年に互る甘肅の回教徒叛亂の結果一時中絶されたことはあつたが、十二年以來再開され、以て康熙二十五年^(一六八六)の瑪哈瑪特額

敏汗の遣使入貢にまで及んだ。

順治五、六年の甘肅の回亂とは、甘、涼の逆回丁國棟、米喇印等が初め故明の延長王朱識鏐を奉じ、後哈密の巴拜汗の王子土倫泰を擁立し、嘉峪關内外の回回を糾合して清朝政權に反抗した政治宗教上の一大叛亂であるが、順治十三年^(一五六)川陝總督金勵の上つた奏文にはその原因を考へて、

前明羈縻外番。多陋習。吐魯番貪無厭。入貢輒携四五百人。詭稱質孥。不以歸。牟利內地。潛通哈密。以故甘肅五郡回衆日多。致滋前變。^(藩部要略 卷十五)

と述べてゐる。然るに回部の側に於ては此の叛亂はまた別の形、哈密の سلطان・サイド・バーバー Sultan Said Babar の支那遠征と云ふ形で傳へられてゐる。即ち彼は回教法を嚴守し、篤信の君主と認められてゐたが、支那に對して聖戦を起し、肅州、甘州^{スベ、チユウ、カン、チユウ}を降して北京^{カン、ペリク}に進撃しようとしてゐた時、適々吐魯番のアブル・ムハメッド汗の軍隊が哈密に侵入したと云ふ報知を得、急遽國に歸つたと言ひ、王子土倫泰のことも、支那内地の回回の叛亂のことも全く見えてゐない。たゞサイド・バーバーは巴拜汗、アブル・ムハメッドは阿布勒阿哈默特汗のことに相違ない。サイド・バーバーの支那遠征は曩の吐魯番汗滿速兒の聖戦と軌を一にし、果して史實であるかどうか甚だ疑はしいが、孰れにせよ甘肅の回亂に際し回部の回回が背後に在つて重要な役割を勤めたことは確かである。矢野博士は曾てこの叛亂の性質を論じて、元明以來支那内地に蔓延した回教徒勢力が王朝交代の混亂に乗じて、漢族勢力と衝突したものであり、決して排滿興漢の運動ではなかつたとされたが蓋し妥當の見解であらう。^(三九)

叛亂平定の後、清が關を閉して回部との交渉を避けたのは固より當然の措置であつたと言はねばならない。茲に興味ある問題を提供するのは、右の叛亂に加つた關外の回回の名稱である。藩部要略^(卷十)等には纏頭回、

紅帽回、輝和爾、哈拉回の四種を擧げてゐるが、それらは果して如何なるものであつたか。從來適當な解釋のなされてゐない紅帽回に就いては特に考察を必要とするであらう。

纏頭回の呼稱に就いては同書に「嘗以白布蒙頭。故稱曰纏頭回。又稱白帽回。回人自呼白帽曰達斯達爾。」と

説明されてゐる如く、回部の回回が内地の回回、即ち漢裝回、漢回とは異なり日常ターバンを纏つてゐた習俗から來たものであるが、この稱呼が見えるのは顧炎武の天下郡國利病書(九邊四夷、西域土地人物略)を以て最初とする様である。(三〇)

もつとも利病書の纏頭回(回)は葱嶺以西の諸國に限られてゐて、東トルキスタン(三二)を敍した部分には見當らない。

近頃の旅行者の報告に據れば、東トルキスタンでターバンを附けてゐるのは僧侶階級に限ると言ふことであり、

古く西域聞見錄などでも阿^ア渾^ハつまり僧侶だけが白布の帽簷を蒙つたと傳へてゐるから、少くとも明末、清初以來(三三)

現在まで回部の習俗には變化がなかつたのであらう。藩部要略に特に「嘗」の一字を補つたのは名稱と事實との喰違ひを説明するためではなかつたか。従つて東トルキスタンの回教徒住民を一概に纏頭回と稱するのは妥當でない譯であるが、清末以降極近年まで纏頭回もしくはその略稱である纏頭、纏回等が普通に用ひられてゐたこと周知の通りである。(三三)

纏頭回を一に白帽回とも言つたのは、先の説明にもある様に、彼らの達斯塔爾に白色の布を使つたからである。達斯塔爾は固よりターバンを意味する波斯語 *dash-tār* の音譯に外ならぬが、徐松は此の言葉を譯して回人の

「纏頭帽」であると言つてゐる。(三四) 白帽回の稱が一般に行はれたのは恐らく康熙朝のことであつて、康熙三十五年

(九六) 哈密の達爾漢伯克額貝都拉的貢表にも「臣白帽族奉貢日久。……」(藩部要略 卷十五) と見える。普通の用例から

考へれば、原文には多分ムスールマンとあつたものであらう。白帽回の名が乾隆朝以後再び用ひられなくなり、

單に回人、回子などと言ひ、特に内地の回回と相對して擧げる場合には民回、夷回を區別し、結局漢回、纏回と並稱する様になつたのは、後段にも述べる如く、それが他の意味を持つに至つたためである。

纏頭回、白帽回を回部の回回の汎稱とする限りに於て、彼らが教義上は回教正統派スンニ教徒であり、更に細分すればハーナフィ派に屬し、此の點で同じくスンニ派教徒であつてもシャーフィ派に屬する漢回と相違すること(三六)は近來の旅行者、研究者の等しく認めてゐるところである。既に説いた様にスンニ派回教の東トルキスタン進出

はカラ・カン朝時代に遡るのであるが、察合台汗の裔孫でカシガル汗家を興したサイド汗などもハーナフィ派の僧侶ホジャ・ハーヴント・ヤムード Hoja Khawind Mahmud = Hazrat Makhdumi Nura に師事し、敬虔

な正統派の信徒であつたと傳へられてゐる。新疆圖志に纏回を十葉教即ちシーヤ派の教徒であるが如くに言つてゐるのは、回教に通ぜぬ漢人の誤解に過ぎない。(三六)

紅帽回の名はティエルザンが譯出した乾隆四十九年(一七八四)の上諭にも白帽回のそれと並んで見えてゐる。之に

注意したヴィシエールは兩者を夫々支那回教に於ける二大黨派新教、舊教の徒を指したものと考へ、紅帽は白帽の如き宗教的表幟ではなくて新教派の叛徒が用ひた單なる合じるしに過ぎなかつただらうと想像する。(四〇) 題の上諭を素直に理解すれば、舊教、新教と白帽回、紅帽回との間に何らの關係をも認めてゐないデ・ホロートに賛成せざるを得ないのである。

於是何らかの新解釋が要求される譯であるが、私見に據れば紅帽回はトルコ語でシーヤ派教徒、特にイーランのそれを指したキジル・バシ Kizil-bashi の意譯に相違ない。既にエリアスも説いた如く、「字義通りには紅頭 red head を、より適當には紅帽 red cap を意味する」此のトルコ語は、イーランのシーヤ派王朝サーファヴィ朝

(一五〇二年—一七三七年)の始祖シャー・イスMAILの親衛軍が紅帽を附けてゐた事實に由來し、それが一般化されて行つたものである。田中幸一郎氏はアフガニスタンに駐屯したナディール・シャー麾下の波斯軍に對しても赤帽族の稱を用ひてゐる。^(四三)明清の交所謂キジル・バシの中に遠く支那内地にまで來住した者のあつたことは、康熙十五年^(一六七六)に北京を訪れた露使スバフ・アリーが明かに傳へるところである。^(四四)

夙にシーヤ派教徒の竄入を見た東トルキスタンの回教に同派の影響が認められるのは當然であらうが、サーフ・ヴィイ朝政權を背景にもつ紅帽回の進出に因つて更にシーヤ派的色彩が加はつたであらうことも想像に難くない。久しく口誦で傳はつて來たシーヤ派教主等のテヅケレが現存の形に編纂されたのは十六世紀のことと考へられてゐるが、これは右の事情を物語るものではなからうか。兎も角も現在ではトルコ族を基調としてゐるにせよ、過去數千、百年に亘る複雑な諸民族の移動、角逐の痕跡を明かに留めてゐる東トルキスタンの回教は、必然の結果として幾多異教文化の殘滓を呈示してゐると共にまた多分にシーヤ的要素を含有してゐることがその著しい特色と思はれる。^(四五)乾隆朝以後紅帽回の名が史上から消え去つたのは固よりサーフ・朝の滅亡に因るであらう。

最後に輝和爾は言ふまでもなく清代に於ける畏兀兒の別譯であり、哈拉回は前代の哈拉灰に外ならない。灰を回に改めたのは單なる普通ではなくて事實彼らが回教を奉じたためであらう。藩部要略に哈拉回の僞都督として擧げられてゐる茂什爾瑪密の名は確かに回教徒のそれである。輝和爾に就いては果して彼らが回教徒であつたか否かを證するに足る何らの確實な手懸りもない。

甘肅の回亂鎮定の後、清朝が回部の朝貢を禁じたことは曩にも述べて置いたが、支那貿易に依存するところの

多かつた回部としては勿論久しく之に堪へ得る筈がなかつた。順治八年には哈密が、十年には吐魯番が夫々入貢の許可を要めた。然るに甘肅提督張勇は先に虜掠せられた内地民人の送還を命じ、容易に回部の乞ひを許さなかつたから、十二年に至つて葉爾羌汗阿布都喇の使者は表文を携へ、民人十五人を獻じて三度入貢を懇請した。ここに及んで清朝も漸く態度を改めて再び回部の朝貢を認めることとしたのであつたが、此の時の葉爾羌汗の使者克拜と云ふのは曾て哈密の使と稱して嘉峪關を款いた者と同一人であつた。そこで此の點に就いて張勇が詰問したのに對して答へた克拜の言葉は次の如く藩部要略(卷十)に載せられてゐる。

哈密、吐魯番、葉爾羌長、皆昆弟。其父曰阿都喇汗。居葉爾羌。卒已久。有子九。長即阿布都喇汗。居葉爾羌。次即阿布勒阿哈默特汗。居吐魯番。先二年(順治十年)卒。次蘇勒檀賽伊特汗嗣之。次巴拜汗。居哈密。以得罪

天朝故。爲葉爾羌長所禁。阿布勒阿哈默特汗子代之。次瑪哈默特蘇勒檀。居帕力。次沙汗。居庫車。次早死。

次伊思瑪業勒。居阿克蘇。次伊卜喇伊木。居和闐。前葉爾羌汗遣其弟自吐魯番請貢。故表稱吐魯番汗名。今以葉爾羌汗爲昆弟長。故表稱葉爾羌汗名。……

阿都喇汗は回部の史料に見えるアブドゥル・ラシド汗の子で、ムハメッド汗の兄弟に當り、同じく九子があつたと言はれてゐるアブドゥル・ラヒーム汗 Abdur-Rahim (望) その人である。たゞその九子の中で長子阿布都喇汗

Abdullah、次子阿布勒阿哈默特汗 Abul Muhammed を除き、それ以下の諸子の名は漢史のそれと完全には一致してをらぬ。何れが是か俄かに判斷は附き難いが、殊に顯著なのはスルタン・サイド・バーバーの名が哈密の巴拜汗・吐魯番の蘇勒檀賽伊特汗と恰も二人の名の様になつてゐることである。その他は姑く措くにしても、かかる矛盾は之を如何に理解すべきであるか。

回教史家に據ると、支那遠征中に吐爾番軍侵入の報を得て哈密に引返したスルタン・サイド・バーバーは、その後間もなくアブル・ムハメッドが死ぬと、吐爾番に入つてこの地に汗となつたと言ふばかりで、葉爾羌汗が巴拜汗を罰したことも、阿布勒阿哈默特の子が哈密の汗となつたことも傳へてはゐない。^(四六) 思ふに順治十年^(五三) 阿布勒阿哈默特の後を承て吐爾番汗の地位を嗣いだ賽伊特汗とは餘人ではなく哈密の巴拜汗その人ではなかつたか。兩者を恰も別人の如くに述べたのは、清朝の思惑を憚つた克拜の遁辭に過ぎないであらう。九子の中次子以下の名が回部と支那とで違つて傳へられてゐたり、阿布勒阿哈默特に回部の史書には見えない無名の子があつた様に言つてゐるのも單に辻褄を合す爲の作爲であつた様に考へられる。まして葉爾羌汗の威令がよくその昆弟に及んだ如く稱するのは如何にしても事實とは受取れない。と言ふのは約一世紀以來東トルキスタンの各地には察合台汗の裔孫が分立し、一族同朋の間で絶えず陰慘な内紛を繰返してゐたからである。さうして俗的君主の權威を衰退せしめたかゝる内亂狀態こそ所謂和卓族^(四九)をして野心を遂げ使めた所以であり、一面から言へば彼らの策謀が内亂狀態を一層激化せ使めたのもあつた。

和卓族の出現に就いては從來から種々の説がなされてゐるが、^(五) ハルトマンに依つて説かれた矢野博士の記述^(五〇) が最も要領を得てゐるから、姑く之に従ふと次の様である。「察合台汗の後裔が東トルキスタンを支配せる當時、サマルカンドより數多の回教宣教師が喀什噶爾に來た中にマハドゥニ・アザム Makhdumi Azam ("Great Master") と云ふものがあつた。彼は西曆一五二〇年頃全世界のサイヅ Sais 即ちマホメットの後裔の中より選ばれて神の光の所有者者即ち豫言者となつたものである。ハルトマンに據ると、彼は少くとも當時の人就

中諸汗王をしてそれを信ぜしむる術を知つてゐた。彼はアブドウル・ラシッド汗(西曆一五三三年乃至一五六六年)の宮廷内に居住し、既に非常の勢力を有した様である。汗は之に與ふるに土地を以てし、又其の諸子に許すに政治に參與する權を以てした。神の光を附與された血統上宗教上マホメットの直系の繼承者は、全世界の唯一の統治者たるべきもので、此の統治を實現するは回教徒の義務である。先づ之を國內に試みそれより外に及ぼすべきであると云ふ考へが、彼の稱號を受け繼いでホジャと稱した彼の子孫に依つて傳へられた。汗の政治上の權力は此の考へに依つて漸次有名無實となつた。(然るに)誰が神の光の眞の所有者であるかと云ふ問題から、喀什噶爾は彼の長子(瑪木特額敏 Muhammed Amin)の子孫に與し、葉爾羌は幼子(イスハク Ishaq)の子孫に與し、(各々附近の布爾特族を援いて味方に附け、)東トルキスタンは二黨に分かれて争ふに至つたと云ふことである。ムハメッド・アミンの黨派が白山黨、イスハクのそれが黒山黨と呼ばれたことは茲に贅言するまでもないが、二黨は清朝の記録には夫々白帽回子、黒帽回子として見えてゐる。(五三)

ホジャ Hoja, Choğa, Khodja < Kh^{wa} adja は元來サーマーン朝時代の官職名で、轉じて貴族の義に解され、現代イラン語では「身分ある人」「富有なる商人」を意味する外、廣く回教世界に擴がつてオスマンリー語では單なる敬稱ともなつてゐる。徐松が「和卓有道者之稱。和卓木 hoja + m “my hoja” 親之之稱。」と説いてゐるのもほぼオスマンリー語の意味に近い。(五四)ただ或る地方ではそれが特別な身分乃至團體員の稱呼として使用されてゐる事實を看過できなう。(五五)

シエフェの説くところに従ふと、(五六)中亞に於ける回教の最大基地ブハラには二種の宗教貴族が存在する。サイド

及びホジャであるが、前者は最初の四人の教主（もしくは教主）の中でオスマン及びアーリの子孫と稱する者達であり、後者はアブー・ベクル及びオマールの後裔、或はマホメットの女以外の妻から生れたオスマン及びアーリの後裔と稱する者達である。サイドはホジャより高い身分と考へられてゐるが、ホジャそのものも系譜書の有無に由つてホジャ・サイド・アタ Said-Ata とホジャ・ジュイバリ Djoubaris とに區別されると云ふ。普通サイドと言へばマホメットの女婿アーリの血統に屬する者即ちアーリド Alides の中でも特に豫言者の女ファティマの所出に係る（ハッサン）、フサインの後を指す例であるが、之にオスマンの後裔を加へてゐることはブハラ回教の特異點であらう。尤もハルトマンの指摘した例に據れば回部ではアブー・ベクルの子孫をもサイドと呼んだ様であり、タリキ・ラシーデ^(五七)ではホジャ・サイド・アタに屬する者にさへ同じ稱號を加へてゐるから、ブハラ以外の地方殊に東トルキスタンに於てはサイドとホジャの區別もしく厳重ではなかつたのであらう。現に西域圖志^(卷四)に派噶木巴爾（=paigambar 豫言者マホメット）二十四世の孫であるとされ、血統上當然賽伊特^{カイ}たるベキ瑪哈圖木阿雜木^{マハドゥミ・アザ}の子孫も和卓と唱へてゐる譯であるが、この和卓が單なる尊稱でないことはハルトマンによつて注意されてをり、^(五八)黑山黨の所傳に據れば白山、黑山二黨の争ひは結局ホジャ・ジュイバリとホジャ・サイド・アタとの對立に還元して説明されてゐるのである。^(五九)

緒西域同文志所載の和卓の系譜^(西域圖志に見ゆ)を檢討したブロッシェは、和卓はシーヤ派第八代の教主^{イサーム}（伊瑪木）阿里伊木西里^{アリ・イム・シリ}難^ザ Ali-yé Moushi Riza < Ali ar-Riza の子孫と自稱するも、トルコ種出身なること疑ひないサーファヴ朝の始祖シャー・イスマイルが第七代のイマームの裔と稱したのと同様、單なる作爲に過ぎず、事實はサイドではなかつたのである、たゞかゝる系譜の捏造に由つて彼らがシーヤ派教徒であつたことが察せられると

論じてゐる。和卓の出自を疑ふ點に於てはハルトマンも同じであるが、シーヤ派教徒ではなく回教神祕主義の流を汲む者と見る點でプロシエと異なつてゐる。^(六二) 回部の回教にシーヤ派の影響が多いことは既に述べた通りで、和卓のテヅケレにもシーヤ派の十二イマームに對する讃辭が見えてゐることは事實である。^(六三) 併し回部のスンニ派回教徒の間で忽ちに成功を収めた和卓がシーヤ派教徒であつたとは大勢上俄かに首肯し難い。寧ろシーヤ的要素を多分に取入れつつも獨自の思想内容を展開してスンニ派からもその立場を承認されてゐる神祕主義 ^{スウフイズム} Soufisme の流れに屬するものと認めるのが妥當であらう。和卓イスハクが數々の奇蹟を行つてキルギスを教化し、マハムード汗を正道に導いたことはハルトマンも例示したところであるが、^(六四) マハド・ミ・アザム六世の祖賽伊特克瑪里丁 Said Kemaluddin Magun がデルヴィシユとしてメッカから西トルキスタンに來たところから筆を起してゐる和卓の傳記テヅケレ・アジーズン Tsekere Azizhan は全く神祕主義の產物である。^(六五)

然らばマハド・ミ・アザムを祖とする和卓は如何なる神祕主義の系統に屬したのであるか。神祕主義が多數の教團に分れ、長老を中心とする修道僧^{僧托鉢}の大小様々の團體を形造つてゐることは周知の如くであるが、マハド・ミ・アザムがナクシュベンディエ Nakshbendiye 派の正統の長老として擧げられてゐる所傳の存するところからすれば此の派の系統を引くものとして誤らないであらう。^(六六) ナクシュベンディエ教團は現在までブハラ^(六七)の國民的聖者として尊崇されてゐるホジャ・バハ・ウディン・ナクシュベンディエ Khodja Baha-ud-Din Nakshbendi^(六八) (回曆七七八四年)を創立者とする中亞最大の教團であるが、帖木兒はカドリヤ Kaderiye^(六九)、マウラヴィヤ Mevleviye = dancing dervishes 等の諸教團と對抗しなければならなかつた創草期の此の教團に多大の援助を與へたと言はれる。かくてナクシュベンディエ派の長老や修道僧は纏てパミール以東に姿を現はす様になり、宣教に努力したらしい。ター

リキ・ラシーディに據れ^(六八)ば、モグーリスタン汗^{ゴール}不思^{ゴール}は同派の長老マウラナ・ムハメッド・カシャニイ Maulana Muhammed Kashani の弟子であり、土爾番汗阿黑麻は、バハ・ウディンの正統を嗣ぐ有名な長老ホジャ・ウバイドゥルラー Khodja Ubaidullah の教を受け、非常な勢力のあつたハズラト・マウラナ・ムハムマド・カディ Hzrat Maulana Muhammad Kadi の弟子なるイウラナ・ホジャ・アーリ Maulana Khodja Ali に師事し、同じくナクシベンディエの長老ホジャ・タジュウディン Khodja Tajuddin ^{(トグルク・チムール汗の改宗に關係したアラジヤド・ウディンの子孫でクサン Kusan(庫車)の住人であつたと云ふ。)}は阿黑麻及び滿速兒の父子二代に仕へること五十年、滿速兒の支那遠征に加つて戰歿したと云はれてゐる。明史等に滿速兒の部下として見える火者他只丁は同一人に相違ない。カシユガル汗サイドはミルザ・ハイダルの紹介で長老ホジャ・ヌラ Khodja Nura の弟子となつたが^(參照 一〇頁)、師父を尊敬するの餘り汗位を彼に譲らんとしたとさへ傳へられてゐるのである。ハルトマンはミルザ・ハイダルが師父と稱する人物は此のホジャ・ヌラに外ならず、ホジャ・ヌラは即ちマハドゥミ・アゼムその人でなかつたかと考へてゐる様である。^(六九)その當否は別としても回部の所傳はマハドゥミ・アゼムを先のマウラナ・ムハムマド・カディの弟子と認めてゐる。^(七〇)

一體ホジャを一つの團體、宗派 Sect として扱つてゐるのはターリキ・ラシーディを以て嚆矢とする様である^(七一)が、バハ・ウディンを始めナクシベンディエの長老が殆んど總てホジャの稱號をもつてゐることは、所謂ホジャの成立の時期と性質を教へるものではないであらうか。又道統 Silsilah をアーリに遡らせるスーフイ教團が大多數を占める中で、ナクシベンディエ派が珍らしくその道統をアブー・ベクルに基けてゐることは、^(七二)ホジャとその始祖との間に存する本來の關係を暗示するものではなからうか。賽伊特たるべきマハドゥミ・アゼムの子孫が和卓と稱した事實は、それが血統上の關係ではなくて、却つて精神上、宗教上の關係であつたことを思はせるのであ

る。大方博雅の士の御示教を仰ぎたい。

諸汗の交伐、和卓の黨争によつて東トルキスタンが全く混亂狀態に陥つてゐた頃、天山の彼方に於ては適々互刺の後なる準噶爾部の勃興があり、回部の運命には一大轉機が齎されることとなつた。

順治十二年(一六五五)漢人俘虜を送還した回部の使者が「察歸内地民百五十。爲準噶爾巴圖爾琿台吉所掠。存者僅

十五人。謹以獻。」(藩部要略 卷十五)と言つてをるところからすれば、準噶爾部と回部との交渉は既に巴圖爾(一六五三 年歿?)

の時代に始まつてゐるのであるが、單なる掠奪戰から轉じて回部の征服を企てるに至つたのは、彼の子噶爾丹

(順治元年又は六年—康熙三十六年 一六四五年又は四九年—一六九七年)の時代のこと過ぎない。噶爾丹は巴圖爾に嗣いだ兄僧格が異母兄弟のために

殺された時(康熙二十一年 一六七二年頃)、西藏に在つて喇嘛の修業を積みつゝあつたが、急遽歸國して兄の讐を報ひ、自ら部長

となつたものである。秦邊紀略には彼が生れながらにして神靈であり、種々の奇瑞を現したこと、部長となつた

後は蒙古族の一員として成吉思汗の故業恢復を畢生の理想としたことを傳へ、非凡な人格を稱揚してゐる。(七三)固よ

り雄材大略の持主であつたに相違ないが、經歷の然らしめるところ喇嘛教教權とは元來淺からぬ因縁を有したの

みならず、第五世達賴喇嘛の執權職桑結とは特に親交があり、自ら護法者を以て任ずるに至つた。噶爾丹の抱懷

する喇嘛教準噶爾世界帝國建設の構想はかくして醸成されたものと認められるが、喇嘛教世界の各地から年々多

數の順禮者を迎へる聖地拉薩に修業期を送つた彼には一面複雑な世界情勢に對する相當の認識もあつたに相違な

い。(十四)か様に考へれば彼が確乎たる信念を以て理想の實現に邁進し、蒙古族掉尾の活躍を演じた理由も自ら理解さ

れるであらう。

孰れにせよ噶爾丹にとつて先づ必要とされたのは伊犁の本據と西藏との連絡を確保することであり、哈密、吐爾番の攻略はかかる意味をもつものであつたに相違ない。パルラスは之を一六七九年(康熙一八年)の事件としてゐるが、親征平定朔漠方略(卷一)、康熙十八年(七九)七月甲辰の條に靖逆將軍張勇の噶爾丹が兵を發して土爾番を侵さんとするを奏報したことを云ひ、

張勇疏言。准提督孫思克移咨云。通丁白金印報稱。噶爾丹委其屬下阿爾達爾和碩齊等三頭目。領兵三萬將侵土爾番。前哨已至哈密。達賴台吉等現差古祿等率百人前赴哈密偵探矣。……

と見え、又八月丁丑の條には矢張り張勇の奏したところとして、

噶爾丹申年所生。年三十六歲。爲人兇惡。耽於酒色。去歲舉兵欲侵西海。行十一日撤歸。今夏又兩次出兵。至纏頭回子之地而還。……

と見えてゐるから、哈密、吐爾番を略取したのは此の時のことと考へて差支へないであらう。(七六)回部の所傳にスルトン・サイド・巴拜(バイ)の長子阿布都里什都(アブドゥルシツド)は父の死後吐爾番の汗位に就き、二弟と争つてゐたが、カルマクのガルダン・ボシクトウ (ガルダン) (ボシクトウ) (Galdan Bosoktu) (噶爾丹博碩克圖) が之に干渉して、阿布都里什都を援けた様に言つてゐるのも此の時のことではなかつたか。

哈密、吐爾番を従へた噶爾丹には聽て回部を服屬せしむべき機會が惠まれた。天山以北に勃興した遊牧諸民族がタリム盆地の城廓諸國を役屬するのは由來公式的事實であるが、噶爾丹の回部征服には別に次の如き事情が存したと傳へられてゐる。即ち此の頃白山黨の首領として非常な勢力があり、マホメットに比肩される尊敬を受け、ゐたのは瑪木特額敏の孫のハズレット・アバク (ハズレット) (アバク) Hazret Apak 一名和卓伊達雅圖勒拉 (ハヂヤットゥルラ) Hodja Hidayattullah だ

あつたが、喀什噶爾汗伊思瑪業勒^{イスマイル}の憎むところとなつて放逐された。アバクはカシュミルを経て西藏に遁れ、達賴喇嘛を介して噶爾丹の援助を求めたから、遂に準噶爾^{ジュンガール}の兵は回部に殺到したと云ふのである。之は黒山黨の所傳で、ビリュウの紹介した白山黨の傳テツケレ・ヒダヤトゥルラーには見えない様であるが、恐らく事實を忘れて載せなかつたのであらう。噶爾丹と喇嘛教教權との關係は茲にも亦如實に反映してゐると言つてよいが、喀什噶爾、葉爾羌の二城を降した噶爾丹は伊思瑪業勒汗の一族をイラー・II^{イラ}（伊犂）に拉致し、從軍せる吐爾番汗阿布都里什都を葉爾羌の汗に擁立して和卓アバクと共に回部を支配せしめることとして引上げたと傳へられる。^(六)

此の遠征の年次に關しては異説が多いが、^(七) 阿布都里什都を伴つたところからすれば恐らく康熙十八年^(一六)以後のことであらうし、噶爾丹がアバクと不和になつた阿布都里什都を伊犂に拘禁したのは康熙二十一年^(一六)のことであるからそれ以前のことであつたに相違なく、パルラスの康熙十九年^(一六)説が最も事實に近い様である。阿布都里什都が拘禁された時、阿克蘇の汗となつてゐたその子のエルケ・スルタン Erke Sulan（額爾克蘇爾唐）も運命を共にした。康熙三十五年阿布都里什都父子が噶爾丹の敗亡後軍所より清に降つたことは親征平定朔漠方略に見えてゐる。^(八) 彼らが康熙二十一年伊犂に囚となつたと云ふのは此の時の口供に基くのである。阿布都里什都に代つて葉爾羌の汗位に就いたのは、彼と從來から反目を續けてゐたその弟瑪哈瑪特額敏^{マハマト・アミン} Muhammad Eminであつた。瑪哈瑪特額敏は康熙二十年^(一六)及び二十五年^(一六)の兩度吐魯番汗として清朝に入貢してゐる。阿布都里什都が葉爾羌汗となつた後、吐爾番汗の地位を得たのであらう。彼が噶爾丹の軍に従つて喀什噶爾遠征に参加したことは回部の史料に見えてゐる。^(九) 康熙二十五年に尙吐爾番汗であつたとすれば、彼が葉爾羌汗に

なつたのは此の年以後のこととなるが、彼は應て回教僧侶の陰謀の犠牲となつて非業の死を遂げた。葉爾羌、喀什噶爾、和闐、阿克蘇、英吉沙爾、烏什（或は庫車）の所謂六城の回部には之以後全く汗、速檀と稱する者はなくなり、準噶爾部の宗主權下に和卓の神聖政治が行はれることになつたのである。

準噶爾部は噶爾丹以來約八十年の間回部を役屬したが、聖武記（四）には此の間の事情を述べて、

當準噶爾時。竭澤以漁。喀城歲徵糧至四萬八百九十八帕特瑪（一帕特瑪は支那石四石五斗に當る）。他稅稱是。葉爾羌歲徵匠役戶

口棉花紅花緞布金鑲銅硝牛羊獐狍麝果園蒲桃之稅折錢十萬騰格（一騰格は五拾錢）。他城稱是。且不時索子女。掠牲畜。故回民村室皆鱗次櫛比。堅墉曲隧。以便窖藏防虜劫。……

と言ひ、回部の史料には準噶爾の徵稅官（西域圖志卷二十九に征收山南回部衛賦。）は諸城に來つて誅求を恣にし、不

輸租地たるべき寺領（^{ツクリ}）からさへ徵稅したと稱してゐる。^{（八四）}

噶爾丹の死（康熙三十六年一六九七年）後彼に代つた策妄阿拉布坦の時に回部の錢、所謂普爾（^{プル}）錢の表面に托克忠字（ハカル

ムック文字）で準噶爾部長の名を鑄、背面に回字（アラビア文字）で鑄造地の名を鑄たこと、噶爾丹策凌が嗣立するに及んで（雍正五年一七二七年）名を易へて更鑄したことは西域圖志（卷三十五）に見えてゐる。^{（錢法）}

又西域聞見錄（卷六）に據ると、

和卓木墨特回子之世家也。回地各城皆準噶爾之阿爾巴圖（^{アルバト} albatu - 隸民）。歲納賦稅。準噶爾以和卓木墨特族

貴。衆所尊服。使總理回地各城。自其祖父以來住居葉爾羌。爲準噶爾辦理回務。和卓木墨特多權術。善收人心。大城諸回皆其心腹。漸欲背準噶爾而自立一國。準噶爾覺其有異心。賺至伊犁。置地牢中。數年始釋。仍

於伊犁禁錮之。和卓木墨特在伊犁生二子。長曰布拉尼敦（^{ブルニ・ウ・ディン} Burhan ud-Din）。次曰霍集占（^{ホジヤ・ン・ハハ} Khodja Jihān）。即回

子所稱之大小和卓木也。……

と言つてゐるが、和卓木墨特は西域圖志(卷四)の瑪罕木特、藩部要略(卷十)の阿哈瑪特、回部の史料に見えるア

ハメド Ahmed に當り、その祖父とはアバクに外ならない。聖武記(卷四)に見えるところは之と多少違つてゐて、

瑪罕木特欲自爲一部不外屬。噶爾丹策凌復襲。執而幽之。并羈其二子。使率回民數千。墾地輸賦。長曰布那敦
亦曰搏羅尼都。次曰霍集占。卽所謂大小和卓木者也。……

と記してゐる。噶爾丹策凌の時に回部の黨争に干渉して白山黨の領首和卓アハメッド、黑山黨の領首和卓ダニヤル Daniyal の二人を伊犁へ拉致し、回人の選立した阿奇木伯克 Hākim Bek "gouverneur" に諸城を分治させたこと、後その二子を質として伊犁に留め、ダニヤルを釋回して回部を總理させ、以て準噶爾主權の強化を計つたことはブルジャーのヤクープ・ベク傳に見えてゐる。(八五) 回部の所傳ではこの事件を策妄阿拉布坦の時代のことの様に言つてゐるが、前後の事情からすれば噶爾丹策凌の時代の出來事と考へる方が正しい様である。(八六)

かくて清初の回部は宗教上では西トルキスタンからの影響を被り、政治上では準噶爾部の支配を受け、康熙二十五年以後は清朝と殆んど直接の交渉がなかつたと言つてもよい。外蒙古の喀爾喀部や青海、西藏等の歸屬問題を繞つて噶爾丹が清朝を敵とするやうになつて以後、兩者の間に介在する哈密が先づ清に内屬し(康熙三十六年)、次いで吐爾番の回人が歸服して肅、瓜等の州境に安插された(雍正三年及び一〇年、一七二五年及び三二年)、様なことは起つたにせよ、回部でも特に重要な六、城アレクシ・シールの地方と清との間には依然として政治的な關係は何も生じなかつた。噶爾丹以後準噶爾部と清朝との關係には一張一弛があり、和戦が繰返されたが、回部の商賈は勿論西トルキスタンの商賈ですら支

那貿易のためには準噶爾部の保護を仰ぎ、その貢使に名を藉らねばならなかつたのである。

然るに乾隆帝の時になつて從來の關係に大變動が生じ、清は直接回部を支配することとなつた。

乾隆十年^(一七四五)噶爾丹策凌が死ぬと、その三子は互に相争ひ、巴圖爾以來四代の霸業は始めて地に墜ちた。準

噶爾部内亂の中心人物は策妄阿拉布坦の外孫に當る阿睦爾撒納であるが、彼は自ら部長たらんと望み、この目的を達するにはどうしても清朝の兵力を借らねばならぬと考へた結果、遙々熱河迄赴いて乾隆帝に謁し、準噶爾征討の議を献じた^(乾隆一十九年一七五四年)。乾隆帝は彼が必ずしも信頼に値する人物ではないことを知つてゐたらしいが、宿

敵を亡し、北邊の患を除く絶好の機會であるとして遂に征討の師を興すに至つた譯である。乾隆二十年^(一七五五)春

二月西北兩路の兵は夫々巴里坤、烏里雅蘇台を發して伊犁に進攻し、内亂に苦しめる諸部落は孰れも風を望んで降つた。準噶爾名家の出身で阿睦爾撒納の當面の敵手であつた達瓦齊さへ戰はずして遁れ、^{モスール・ダールバン}冰嶺の路に由つ

て回部に奔つたが、烏什の阿奇木伯克霍吉斯のために擒獲されて清軍に引渡されるに至り、伊犁全部は僅かに百餘日の短時日を以て豫想外に容易に平定を見たのである。

たゞ自ら部長たらんと期してゐた阿睦爾撒納は清の善後措置を不満として忽ち叛亂を起したから、伊犁は再び敵地と化し、乾隆二十二年^(一七五七)三月再度の準噶爾征伐が敢行され、清軍は伊犁に攻め入つた。阿睦爾撒納は一個の奸雄ではあつたが、準噶爾部長の正裔ではなく、人心を服し得なかつたのみならず、適々伊犁の谷地には痘疫が猖獗を極め、諸部落の疲弊も甚しかつたので、清軍は各地に轉戦して膚効を奏することができた。慘敗した阿睦爾撒納は西伯利亞に遁れて痘病に斃れ、中心を喪つた伊犁の叛徒は次第に鎮壓され、乾隆二十五年^(一七六〇)には餘賊全く平いで準噶爾の故地は悉く清朝の有に歸するに至つた。

かくて準噶爾部を勦滅した清朝が先にその隸民たりし回部を服屬せしめんとしたのは當然のことである。噶爾丹策凌の支持を得た黒山黨が政權を得たことは曩に述べて置いたが、準噶爾部に内亂が勃發すると彼らは此の機會に乗じて兼ねての希望たる回部の獨立を企てた。^(八七) 第一回の準噶爾征伐に際して清が白山黨の大小和卓木の禁錮を解き、兄布拉尼敦を回部に歸らしめ、弟霍集占を伊犁に留めてその地の回教徒を取締らせたのは黒山黨の策動を封ぜんとするものであつて、阿睦爾撒納の獻策に依つたとされてゐる。^(八八) 果してそれが事實であれば阿睦爾撒納と大小和卓木との間には最初から諒解が成立してゐたに相違ないが、阿睦爾撒納が叛くと霍集占は伊犁の回教徒を率ゐて之を援け、黒山黨の勢力を打破して喀什噶爾、葉爾羌に據つた布拉尼敦も遙かに呼應する態度を示した。應て回部に遁れ歸つた霍集占は兄に説いて獨立を計り、諸城に檄を傳へて公然清に叛旗を翻したから、回部數十萬の衆は之に應じて非常な大亂となつた。乾隆帝は始め平和の方法で招撫する積りであつたが、到底不可能なることを悟るに及んで伊犁の軍を移して平定せしめんとした。^(乾隆二三年一七五八年) 準噶爾の一大劫と稱される程伊犁では用兵慘酷を極めた清軍も回部では民心收攬に努めたが、夙に和卓の秕政が人心の離叛を促した上に傳統的な諸城分立の形勢と和卓の黨争の存在は回部の結束を妨げた。かゝる状態に於て清の大軍を迎へ投降する者は相次ぎ、意氣全く沮喪した大小和卓木は殆ど一戦を試みる勇氣もなくしてパミール山中に遁れ、清軍は之を窮追して色勒庫爾からアム河上流の伊西爾庫爾湖に達した。進退谷まつた従逆の回子數千は清軍に降り、僅かに妻子、舊僕三四百人を伴つた和卓兄弟は巴達克山に頼らうとしたのであるが、その蘇爾坦沙は却つて兩酋を擒殺して首級を清に獻じたので、回部の騷亂は茲に全く鎮定するに至つた。^(乾隆二十四年一七五九年)

準、回二部の平定はパミール内外の諸國、諸部族にも大衝動を與へた。哈薩克三部は清の藩臣となり、東西布

魯特も相次いで内屬し、敖罕^(浩罕)、布哈拉、愛烏罕^(烏什)等の諸國も夫々臣と稱して入貢した。もつとも浩罕の一國を除いては殆ど回部に於ける貿易關係があつたと云ふに止まる。

三

準、回兩部を裁定した清朝では新辟の疆土の意味で二部の舊域を新疆と呼び、天山を界として南北の二路を分つと共に將軍、大臣以下の官屬を設け、駐防、換防の兵制を定め、多く陝、甘の下貧を募つて移住せしめて之が統治、經營に乗り出した。かくて植民地的經營がなされた北路地方に於ては勿論、軍事留保地として漢人の移住が禁止されてゐた南路回部に於ても城堡、台站の修築、滿漢官兵の往來に伴つて漢人の隨從者、傭工者の入込む者が多く、商賈の新市場を訪れる者も亦少くなかつた。地の孔道に當れる阿克蘇に於ては、「内地の商民、外番と貿易し、鱗集星萃す。街市紛紜^(ハヤ)。八柵^(バザール)爾の會期に逢ふ毎に肩を摩し汗を雨ふらし、貨雲の如くに擁つた」し、葉爾羌に於ては「中國の商賈、山陝江浙の人、險遠を辭せずして(其の地)に貨販し、外番の人、安集延^(アンディヤン)、退擺特^(タウバト)、郭爾^(コル)、克什米爾^(カシュミール)等の處、皆來つて貿易する」の活況を呈した。^(八九)準噶爾の誅求より救はれ、和卓の秕政を脱し、打續く禍亂を免れた回部の民衆が、賦税を減じ、舊慣を重んじ、彼らに平和と繁榮とを齎した清朝の統治に感謝の念を覺えるに至つたのは寧ろ當然の成行きであつたであらう。^(九〇)

それにも拘らず清朝の治下に置かれてから數十年を経た道光朝の初め頃以後回部には頻りに叛亂が起つた。^(九一)道光六年^(一八二六)喀什噶爾、英吉沙爾、葉爾羌、和闐諸城を陥れた張格爾^(ガハル) Ghilgair の亂、道光十年^(一八三〇)喀什噶爾、英吉沙爾、葉爾羌の諸回莊を奪ひ、諸城を包圍した張格爾の兄玉素普^(ユスフ) Yusuf の亂、道光二十七年^(一八四七)張格爾の甥邁買^(マイ)明^(ミン) Muhamed Emin、倭里汗^(ワールハン) Wai Chan 等七和卓木の入寇などの諸事件は相次いで起つた。張格

爾は巴達克山から遁れて浩罕に匿れた大和卓布拉尼敦の遺兒薩木薩克 Sarimsaq の子であり、彼の一族子弟が企てた回部侵擾は畢竟白山黨和卓の失地恢復運動に外ならないが、之に對して黒山黨は清朝政權を擁護する立場を取つたと傳へられる。^(九二) いづれにせよ民族上、宗教上の一般的な對立以外に「素より性慚怯、久しく己に習ひて恭順たりし愚回」をして蹶起せざる得ざら使めた直接の原因は清朝、より正しくはその派遣官吏の側にあつたが、^(九三) 回民の「和卓を崇信するの習に惑ひ」、容易にその「煽惑を被るを致した」ことが諸叛亂の根本的な原因であつたことは疑ひない。^(九四)

尤も此の場合張格爾の亂以來和卓の背後に在つて彼らを教唆、操縦し、或は兵力を以て彼らを助けた浩罕の存在を見通すことはできない。回部で安集延回子と呼ばれてゐた浩罕商人が克什米兒商人と共に回部に寄跡し、その貿易を牛耳つたことは西域聞見錄^(卷三外藩)等に見えてゐるが、張格爾の入寇に際して彼らは所謂白帽回子や朵蘭回子と共に和卓の耳目となり、内應を辭せなかつた。之がために清朝は安集延回子の財産を沒收し、回部の境外に彼らを追放して茶葉、大黃等の貿易を一切禁止するの非常手段に出た譯であるが、商人に課する商税に財源を求めねばならなかつた浩罕汗は武力報復を決意し、遂に和卓玉素布を擁して回部に入寇したのであつた。浩罕の侵入に懲りた清朝では再び安集延回子の入境、貿易を許し、免税の特權を與へたが、^(九五) 浩罕汗は尙商頭をして回部に寄居する自國の商人より徵税せしめ度いと繰返して要求した。^(九六) 清朝では固よりかかる希望に應ずる筈がなく、^(九七) 之を不満とした浩罕汗は益々和卓を支援する態度に出た様に考へられる。露西亞の侵略に自國の滅亡の避け難いことを悟り、自己の新しい運命を開拓しようとして同治四年^(一八六五) 浩罕の將ヤクープ・ベクが張格爾の子布

素魯克 Buzurg を擁して回部に入り、忽ち之を廢して自らカシガル汗國を建設したのは、浩罕が和卓の遺孽在るを以て奇貨とし、久しく彼らを利用し來つた必然の結果であつたと言つてよい。

併し清朝は單に回部に於て和卓の反抗と浩罕の野心とに悩んだばかりではなかつた。内地に於ても回部からの影響下に新教、舊教の對立は生じ、反動的な新教徒によつて捲起された歴次の叛亂は清朝をして奔命に疲れしめることになつたのである。

新教、舊(老)教の對立が回部からの影響によるものであつたことは先に掲げた乾隆四十九年の上諭にも認めてゐるところであるが、聖武記(卷七、國朝廿七、肅再征叛回記)には新教の起原を説明して、

乾隆初撒拉爾黑帽回者。居西寧番地。俗介番回。鷺悍好鬪。所奉墨克回經。舊皆默誦。有循化廳回馬明心者。歸自關外。見西域回經皆琅誦。自謂得真傳。遂授徒號新教。與老教相仇。……

と述べてゐる。ただ實錄(乾隆四十六年四月戊申王廷贊的上奏)に據れば馬明心は「安定縣の回人」であり、乾隆二十

七年「撒拉爾に潛入して」「禍福を妄言し、愚民を煽惑したために、地方官の訪明を経て逐出された」者であつた様である。撒拉爾 Salar は西寧府屬循化廳を中心とする黃河流域地方に住んでゐるところの言語、容貌共に明瞭にトルコ的な一種族で、彼らが漢回の中でも特別な集團をなすことは從來から諸家によつて注意されてゐる。(100)

もつとも今日までのところではその來源も不明であれば、何故回部の黑山黨同様に黑帽回子と呼ばれたかも詳かでないが、支那回教徒の革新運動が彼らの間から起つたと云ふことはまぎれもない事實である。

現在では新教、舊教の區別は教理、教義よりも寧ろ生活態度や二三の宗教的習俗の相違に在るらしく、到底教派(セクト)の相違とは考へられないが、最初(101)は必ずしもさうではなかつた様である。和卓アバクの死後間もなく編纂さ

れたと認められてゐる彼の傳記テヅケレ・ヒダヤトゥルラーに據れば、彼の感化は遠く回部以外の諸地方にも及び、支那の東干^{ツングニ} Tungan の間にさへ信者ができたと言ふことである。⁽¹⁰¹⁾ 果して彼の教化に由るか否かは別として

甘肅の回教徒がナクシユベンディエ派等のスーフィズムの影響下に在つたことは、ドロース調査團が同地方から將來した十一種の回教文獻の中に五種に上るこの系統の典籍が見られることから明かである。⁽¹⁰²⁾ 馬明心が「禍福を

妄言し」、新教徒が「顯聖を妖言し、搖頭して念經し、跳舞した」^(乾隆四十六年五月丁丑上諭) ことは彼らが回教神秘主義の信

奉者であつたことを物語るであらう。撒拉爾出身の一回教徒と交渉を持つたティエルザンは夙に新教がスーフィ

ズムの運動ではないかと疑つたのであるが、實地の見聞や文獻的研究の結果は之を立證するに至つた。⁽¹⁰³⁾ ヴィンエ

ールの如きは甘肅の回教徒の間に行はれてゐる回教の儀禮の分類法に依據して、新教がスーフィズムの中でも特

にカドリヤ派 Kadriya の系統に屬するものであつただらうことを推測してゐる。⁽¹⁰⁴⁾ 或はさうであるかも知れない

が、回經を琅(朗)誦し、跳舞する儀禮は所謂ダンシング・デルヴィシ^{即ちマウラヴ} 派 Maullaviyah のそれ

である。従つて新教は本來純粹なカドリヤ教團ではなくて一種の折衷派と言ふよりは寧ろ皮相な模倣派であり、

馬明心は一個の野心家、煽動家であつたと見るのが至當であらう。^{**}

かくて馬明心は漢回の間^{に於て}恰も回部に於けるマハドゥミ・アゼムの地位を占めるのであるが、新教、舊教

の抗争は地方官吏がその對策を誤つたために纏て乾隆四十六年三月から六月に亙る蘇四十三等撒拉爾新教徒の叛

亂となり、此の役に馬明心が擒殺されるや、その復仇を標榜して新教徒は乾隆四十八年^(一七)四月再び阿渾田五

の指揮下に叛旗を翻し、七月に至つて漸く鎮定された。この後咸豐十一年^(一八)撒拉爾回匪は西寧を擾し、間も

なく鎮壓を報ぜられたが、⁽¹⁰⁵⁾ 同治元年^(六二)又もや叛して同治三年^(六四)には循化廳を陥れた。⁽¹⁰⁶⁾ 陝、甘回匪の大叛

亂以後に於ても光緒二十三年、四年に亙つて撒拉爾回は蜂起した。^(二〇六) 乾隆朝に於ける第一次の撒拉爾叛亂以後清朝が新教の禁壓に努めたに拘らず、それが次第に漢回の間に勢力を擴張して行つたことは次に引く左宗棠の上奏にも見え、明白な事實であるから、屢次の撒拉爾の叛亂も必ずや新教徒を中心とするものであつたであらう。

同治十年^(七一) 左宗棠が上つた請禁絕回民新教疏^(道光奏)に據れば、

乾隆四十六年馬明心、蘇四十三由西域歸。詐稱得天方不傳之秘。創立新教。煽惑愚回。謀爲不軌。四十九年田五繼之。大軍先後致討。罪人斯得。然其根株未能盡絕也。嘉慶年間有穆阿渾、與首逆馬化澂之父馬二復以新教相傳授。而其餒漸張。後托名經商。到處煽惑回民。行其邪教。……

と見え、新教領首の系譜と新教流傳の經緯とを述べてゐる。余の乏しい知見を以てすれば、此の種の史料としては唯一のもの様であるが、同治、光緒十數年に亙る陝、甘回匪叛亂の中心的人物も矢張り新教徒、而もその首領^(總大阿訇)渾^(渾)であつた譯である。右の疏奏には、新教舊教の相違に就いても纏つた記述があり、馬化澂が「自託神靈。妄言禍福。行爲詭僻。」したことを言つてゐる。尙ヴィシエールは馬化澂が「マホメットに比肩され、寧ろ之に勝る神人——靈性の所有者——を以て目されたことと、その死後誰が靈性の所有者であるかと云ふことから彼の孫と女婿との間に對立が生じたことをも教へてゐる。^(一一〇) ハルトマンが馬化澂一派を和卓の模倣者と見倣してゐるのも故無しとしない。^(一一一) 雲南回匪の間にも新教の影響の及んでゐたことは又ヴィシエールによつて指摘されてゐる。^(一一三)

かく考へ來る時、吾人は和卓の意外に久しく且廣く及ぼした影響に驚かざるを得ないのであるが、清末の新疆回教徒大叛亂は或意味ではその總決算であつたとも見られる。

新疆の全面的叛亂の主動者は言ふまでもなく東干即ち清朝の回部征服以後陝、甘より新疆に移住、客寓するに

(二三)

至つた漢回であり、彼らの間には恐らく新教徒も少くなかつたであらう。陝、甘の同族に呼應して彼らが驟起すると、纏回も機に乗じて清の羈絆を脱せんとしたが、その指導者の中には和卓が含まれてゐたと傳へられる。^(二四)纏回の要望に答へて救援に赴いたヤクブ・ベクも亦和卓の正裔布素爾克を擁してゐた。かゝる状態に於て神聖國家の再建も一應不可能事ではなかつた様に思はれるが、言語、習俗を異にする漢回、纏回の對立は清朝政權を驅逐するに及んで忽ち表面化し、漢回は和卓を推戴することを肯じなかつた。纏回の間にも依然として黨派の對立があつたばかりではない、歲月の經過と共に和卓そのものに對する信仰も衰へてゐた。かくて結局漁夫の利を獲たものはヤクブ・ベクに外ならなかつた。彼は和卓に代つて最高權力を掌握すると共に中亞回教の最高首長たるブハラ汗よりアタリク・ガージイの稱號を受け、回教君主としての自己の地位を固め、嚴重な回教法を施行して纏回を拘束したが、一方に於ては小黨分裂せる漢回勢力を次々に粉碎して殆ど東トルキスタン全境を支配するに成功したのである。

ヤクブ・ベクによるカシユガル汗國の建設は和卓族の野心に終止符を打つた。彼が驕て敗退し、再び清朝政權が樹立された時、既に英露の勢力は南北からする東トルキスタン包圍態勢を完成してゐた。東トルキスタンを窺視するものは今や西歐資本主義勢力であり、無力な回酋の策動する餘地は全く喪はれたのである。民國革命以後に於ても東トルキスタンの回教徒は屢々叛亂を起したが、彼らを操るものは英、露(ソ聯)の二國に外ならなかつた。貪婪な回酋の煽惑を被る以上に彼らが不幸であつたか否かは別問題として、漢回、纏回は自ら悟らず英、露の利益の爲に戦つたのであつた。

註

- (1) Dureau de Rhins; Mission scientifique dans la Haute Asie, Vol. I pp. 1—46.
Blochet, La conquête des États nestoriens de l'Asie centrale par les Schites. (Revue de l'Orient Chrétien T. V Nos 1 et 2 (1925—26) pp. 3—131.) p. 19 seqq.
 - (11) Dureau de Rhins: *ibid.*
Barthold; Turkestan Dawn To The Mongol Invasion, pp. 254—6.
羽田亨・中央亞細亞の文化 (岩波東洋思潮) 七二頁、九六—七頁。
Encyclopédie de l'Islande, art. Ilék-khans, Kashgar, Türks.
 - (12) Encyclopédie de l'Islande, art. Türks. (Vue d'ensemble historique et ethnographique)
 - (13) 羽田亨・前掲書九七頁。
 - (14) Yule and Cordier; Marco Polo, Vol. I p. 210.
 - (15) Grousset; Histoire de l'Extrême-Orient, p. 481—489.
 - (16) 明史・卷三百二十九、西域四、哈密、土魯番、卷三百三十二、西域四、別失八里。
Elias and Ross; Tarikhi Rashidi (Introduction)
 - (17) *ibid.*—
 - (18) Bernard H.; Le Frère Bento de Goes chez les Mulsulmans de la Haute Asie (1603—1607), p. 138.
- (10) Grousset; *ibid.*
田中萃一郎譯「ドーソン蒙古史 (岩波文庫版)」下卷一
七二頁。
 - (11) 西域番國志 (北平圖書館善本叢書第一集)
魯陳城……人民醇朴。有爲回回體例者。……有爲畏
兀兒粧束者。……方言皆畏兀兒語言。火州、土爾
番、魯陳三處。民風土產大概相同。
 - (12) Yule; Cathay And The Way Thither, p. cc.
 - (13) Schefer; Abdoul Kerim, Histoire de l'Asie centra-
le, p. 299.
 - (14) Elias and Ross; *ibid.* p. 12—3*, 20* etc.
 - (15) Bernard; *ibid.* p. 97 seqq
 - (16) Yule and Cordier; Marco Polo, Vol. I p. 210.
 - (17) 大明一統志・卷八十九。
 - (18) 西域番國志
哈密城……蒙古回回雜處於此。衣服禮俗各有不同。
 - (19) Breitschneider; Medeval Researches Vol. II p. 177
 - (20) 皇明象胥錄・卷六
 - (21) Yule; Cathay and The Way Thither p. cc
 - (22) 明史・卷三百二十九。
哈密衛。其地種落雜居。一曰回回。一曰畏兀兒。一曰哈剌灰。
 - 殊域周咨錄・卷十二。
鄭曉、皇明四夷考・卷下、哈密條。
弘治四年……(馬)文升曰。哈密有回回、畏兀兒、哈

拉灰三種。共居一城。

葉尙高、四夷考・哈密考。

(三) 明實錄、弘治十年十一月庚子の條。

桑田六郎氏、回鶻衰亡考、東洋學報卷十七第一號一三六頁。

辛卯侍行記・卷六。

(四) 殊域周咨錄・卷十二。

(五) 明史・卷三百二十九、殊域周咨錄・卷十三等。

(六) Tarikhi Rashidi, p. 127.

(七) Dutreuil de Rhins; *ibid.* Vol. II p. 10.

(八) Hartmann; *Der Islamische Orient*, S. 301.

(九) 矢野博士、近代支那史・一〇一頁。

(三〇) 王日蔚、維吾兒(纏回)民族名稱演變考・「禹貢」第七卷第四期二七頁以下。

(三一) Dutreuil de Rhins; *ibid.* Vol. II p. 196, 231.

(三二) 西域聞見錄卷七。

男帽冬用皮。夏用綢綾猩氈爲頂。倭綴爲翅。高五六寸。前後尖翅亦各長五六寸。……阿渾帽簷。白布爲之。中填棉絮。高厚各五六寸。有一種瓜。名回回帽。形頗似之。

(三三) 王日蔚、前掲論文。

(三四) 徐松、新疆賦(西域三種)

(三五) 王日蔚、前掲論文。

(三六) Dutreuil de Rhins; *ibid.* Vol. I p. 231.

Broomhall; *Islam in China*, p. 158, no. 1. 等

ルザンに據つたと云ふが、檢出できなかった。

Encyclopédie de l'Islame, art. Chine.

(三) Forsyth; *Report of Mission to Yarkand*, 1873, p. 173.

(三) 新疆圖志卷一、建置一、迪化府の條、
纏商列市南郭。其俗奉十葉教。

(三) Thiersant; *ibid.* p. 234—6. 問題の個處を掲げれば次の通り。

……C'est depuis cette époque (= conquête du Turkestan) qu'il y a en Chine des mahométans, un bonnat rouge et des mahométans au bonnet blanc ……

原文(清眞釋疑補輯所收)は、

上諭。……夫內地回人其來已久。我國家威稜遠播。

平定準噶(爾)回部。西域咸隸版圖。新疆回人年班入覲。往來絡繹。內地民人亦多至回疆貿易。其有查對經卷講習規條者。相習爲常。例所不禁。遂有紅帽白帽新教舊教之名。其實新疆之回人正其舊教也。……

(四〇) D'Ollone; *Recherches sur les musulmans chinois*, p. 313, 315. シェンメルは右の上諭を次の如くに譯してゐる。

……Ensuite il y eut les bonnets rouges et les bonnets blancs qui servent à désigner la Nouvelle et l'ancienne religion (Sin-Kiao, Kieou-Kiao).

(四) De Groot: *Sectarianism and Religions Persecution in China*, p. 323.

問題の個處は次の如くに譯されてゐる。

But then there have arisen denominations such as Red Turbans, White Turbans, New Religion, and Old Religion.

(四) Elias and Ross: *ibid.* p. 214.

(四) 田中萃一郎、東邦近世史(岩波文庫版)上巻三一八頁。

(四) Badeley: *Russia, Mongolia, China*, Vol. I p. 366—

7.

(四) Blochet: *ibid.* p. 19. に據れば阿布都拉汗^{アブドゥラ} Abd Allah の治世に編纂されたと云ふ。

(四) 異教的要素の一例としてジャダの法を擧げる。西域關見錄卷七、回疆風土記風俗の條には、

割答。堅如石。青黃赤白綠黑。色不一。大小亦不齊。生牛馬腹中。亦有生蜥蜴尾根及野豬頭。腹中者尤良。回人祈雨。則以柳條繫之。置淨水中即雨。祈風則繫之懸馬尾上。祈陰則繫之腰繫。各有所祈之呪。莫不響應。回人及土爾樹(扈?)特、額爾特、多於夏日長行。用以辟暑。用之謂之下割答。喇嘛下之尤速。

と見える。古來北方民族の間で廣く行はれてゐたジャダの法が回疆に入つたのは、トルコ族、蒙古族の移住に伴つた事實であらう。トゥルファンから支那へ向ふ隊商が此の法を行つたこと、呪文の一つとしてコーラ

ソのアラシヤムス(太陽)の章が唱へられてゐる。ヤハフが傳へてゐる。(Schefer; *Histoire de l'Asie centrale*, p. 300 参照)

同じ西域聞見錄(卷七、風俗)に、新年より始めて回人の年中行事を述べ、

回子赴素所信奉之人墳墓。禮拜諷經。多於頸項咽喉間用刀透穿其皮。以布縫穿之。血流徧體。云以其身祭神靈也。謂之烏蘇爾。

とあるが、回疆志には、

又一日曰鄂舒爾。係瑪哈木當敏(實は瑪哈木特・マホメットの偽)之外孫衣瑪木哈散、衣瑪木烏散等被賊殺害之日。……

と見える。鄂舒爾、烏蘇爾は共に回語ウスラ Ousla の音譯である。ウスラは言ふまでもなくシーヤ教徒がケルベラの戦で斃れたアリーの子烏散(ホサイン)の殉教を記念し、追悼する祭日で、流血して慟哭するシーヤ派教徒の熱狂的な祭事が回部にも存したことを知り得る。

右に引いた回疆志は京大所藏の四卷本の寫本で、乾隆三十七年の序があり、それに據ると尙書都統今太宗伯永貴等が撰したものであると云ふ。回人や布爾特的風俗圖が描かれてゐる外、若干他書に見えぬ資料も取り入れられてゐる様で、研究の價值があると思はれる。刊本があるかどうか、寡聞な筆者は知らない。博雅の士の御示教を乞ふ。

- (四) Hartmann; *ibid.* p. 292. seqq. 294 n. 2. 295. seqq. 300. 344. A.I. 2. A2.
- (四) *ibid.* p. 301.
- (四) Forsyth; Report. p. 173.
- Boulger; Yakoub Bek, p. 37.
- (四) Elias and Ross; *Tarikh-i-Rashidi*. p. 127.
- (四) $\text{ハム・ヤ・ハム・ハム・ハム・ハム・ハム}$ を始祖と説く。
 66。
- Forsyth; Report, p. 174.
- Thiersant; Mahomet me, p. 261.
- Lansdell; *Chinese Central Asia*, Vol. 2. p. 5.
- ブルジャー(前掲書)は別の説き方をしているが混同があるらしく要領を得ない。
- 回疆志卷二には瑪哈木管敏を以て回地之始立教者とす。
 2。
- 西域水道記(卷一)には次の如く言つてゐる。
- 西方有墨克及墨德那諸國。始汗曰青吉斯汗。其裔孫派噶木巴爾(マホメント)倡回教。爲第一世。傳至三十五世。曰瑪木特額敏。產四子。長曰哈色木。遷布哈爾國。仲曰木薩。遷拜勒哈國。叔曰墨敏。居故地。季曰瑪木特玉素布。遷喀什噶爾。喀什噶爾之有回教自茲始也。
- 黒山党の傳ではマハドヤミ・アゼムの子イヌハクナリ始めてカシガルに遷つた様な書を考へてゐる。(ハルトマン前掲書参照)
- (四) 聖紀・卷四・道光重定回疆記。
 實錄・道光八年十一月癸卯上諭等。
- (四) Barthold; *Turkestan*. p. 229—30.
- Magoudi; *Les Prairies d'Or*. Vol. II. p. 24.
- (四) 西域水道記・卷一。
- (四) *Encyclopédie de l'Islam*, art. Khodja
- (四) Schefer; *Histoire*, p. 95. note (1)
- (四) Hartmann; *Der Islamische Orient*, Bd. I. S. 196.
- (四) Elias and Ross; *Tarikh-i-Ra hidi*, p. 239.
- (四) Hartmann; *ibid.* S. 211.
- (四) *ibid.* S. 199.
- (四) Blochet; *La conquête des États ne toriens*, p. 39. seqq.
- Hartmann; *Chinese Turkestan*. SS. 16—17. 42.
- (四) Hartmann; *ibid.* S. 307.
- (四) *ibid.* S. 42.
- (四) Hartmann; *Der Islamische Orient*, Bd. I. SS. 195—288.
- (四) *ibid.* SS. 307—15.
- (四) Vambéry; *Geschichte Bokharas*. S. 228.
- (四) Bouvat; *L'empire mongol*, p. 42.
- (四) Elias and Ross; *Tarikh-i-Rashidi*, p. 67. 213. 372—3. 395. 398.
- (四) Hartmann; *Der Islamische Orient* Bd. I. SS. 317—8.
- (四) 註(四) 參照。

- (41) Elias and Ross; *ibid.* p. 10.
- (42) Encycloédie de l'Islame, art. Tarikat.
- (43) Hughes; Dictionary of Islam, art. Faqir.
- (44) 内藤博士、秦邊紀略の噶爾丹傳（讀史叢錄・二〇三頁以下）
- (45) Courant M.; L'Asie centrale aux XVII^e et XVIII^e Siecles, p. 48.
- (46) Pallas; Samlungen historischer Nachrichten. Vol I S. 40.
- (47) 矢野博士（近代支那史・七四頁）も康熙十七、八年頃に噶爾丹が哈密、吐爾番を服屬せしめたことを承認される。たゞ藩部要略（卷十五）の康熙十八年の記事に基いて、この年以前既に彼は哈密を従へてゐたが、此の年に兄の子策妄阿拉布坦に服屬してゐた吐爾番をも奪取するに至つたのであらうと解してをられる。併し藩部要略の右の記事に矛盾のあることは同書の康熙三十四年の條と對照すれば明かである。クラーン（前掲書六四頁）は策妄阿拉布坦と噶爾丹は一六八八年（康熙二十七年）以後對立する様になつたことを明かに述べてゐる。これは支那側以外の史料に據つたもので確實と認められる。康熙十八年噶爾丹の征服したのは矢張り哈密、吐爾番の兩地に相違なく。
- (48) Hartmann; Der Islamische Orient, Bd I, S. 302.
- (49) *ibid.* SS. 210—214.
- (50) Lansdell; *ibid.* pp. 54—5.
- (51) Hartmann; *ibid.* S. 301. Valichanov, 1676, Pallas und Jakynth Biturin, 1679, Grigoriew（西北利延に指薩となりし一將校の傳記による）1683, Ms. 509, oi. 1682. (1093 Hira)
- (52) 聖武記（卷四）乾隆裁定回疆記に、
值厄魯特（準噶爾）強盛。盡執元裔諸汗。遷居天山以北。……回部各城則分隸諸昂吉。徵租稅。應徭役。并質回教會于伊犁。康熙三十五年噶爾丹敗後。其質伊犁之回會阿布都賈特（阿布都里什都）自拔來投。……是爲霍集占兄弟之祖。……
と言つてゐるのは固より誤解である。
- (53) 藩部要略・卷十五。
- (54) Hartmann; *ibid.* S. 301.
- (55) *ibid.* S. 215.
- (56) *ibid.* S. 226, 227.
- (57) Boulger; Yakoub Bek, pp. 44—45.
- (58) Hartmann; *ibid.* SS. 222—5.
- (59) Courant; *ibid.* p. 115, seqq.
- (60) *ibid.* Boulger; Yakoub Bek, p. 46.
- (61) 西域聞見錄卷二、新疆紀略下。
- (62) Boulger; pp. 5—6.
- (63) 曾問吾・中國經營西域史、中編第三章「回疆之多亂」
- (64) 聖武記卷四、道光重定回疆記。
- (65) 前項參照、實錄・道光六年八月丁巳の上諭、
諭軍機大臣等。新疆回部向隸準噶爾。悉索敵賦。不

堪苦累。其附近布噶特者搶劫剽掠。尤不勝其欺陵。自我朝平定回疆以來。各城回子咸隸版圖。納賦交糧輕減者。奚啻倍蓰。而布噶特亦震懾天威。不敢入卡滋事。八城回子安居樂業者垂六十餘年。雖其結習崇信和卓。而愚回素性慚怯。久已習爲恭順。何至遽思變亂。總由近十餘年來。歷任參贊辦事大臣等貪淫暴虐。回子等忿恨忍受。……

(六) 實錄道光八年五月壬子、

……各城回子受天朝覆育深恩。垂六十餘年。何至自外生成甘就夷滅。總由惑於崇信和卓之習。未能前除。致被煽誘。……

(五) 朵蘭是多倫、情蘭等にも作る。何れも Dolons, Dolans, Dulans 等と呼ばれる一種族を指す。ドラン族は或は

キルギス種、或はチベット種、或は蒙古種と考へられるが、マラルバシを中心にタリム河沿邊に於て半農半牧生活を送つてゐる。朵蘭と和卓との關係は西域聞見

錄(卷二新疆紀略下)、西陲要略(卷二南北兩路城堡)等に(布古爾回城の條)、

に「回子中別一種也。爲霍集(吉)占(親近)牧馬畜(養)鴨之戶。」と説明されてゐる。Dula(n) < *Dyula

(二) の形はこの種族が曾てのドグラト家の部曲民—蒙古種の一たりしことを推測せしめる。

(六) 十一朝東華錄、道光十一年十月壬寅の條。

(七) 十一朝東華錄、道光十二年六月癸卯。

同 道光十六年五月癸未。

(八) ブールジャー及びランスデルは清が浩罕に抽税を許し

た様に言ひ、殊にランスデルは一八三二年(道光十二年)をその許可の年次としてゐるが、前項に見える如く道光十六年にも復浩罕汗から同一の要求が提出されてゐる以上事實とは考へられない。

Bouger; Yakoub Bek, p. 64,

Landell; Chinese Central Asia. Vol. 2, p. 57

(九) 註(元) 參照。

(100) サラル回教徒と第一次叛亂(回教事情第二卷・第二號)

Dutheil de Rhins; ibid p. 457.

D'Ollone; Recherches, pp. 245—6, 307.

Bretschneider; Medeval Researches, p. 126—7.

De Groot; Sectarianism, p. 311, note. 1.

(101) Broomhall; Islam in China, p. 253.

支那回教に於ける新教と舊教に就て(回教事情・第三卷第一號)

卷第一號)

Encyclopédie de l'Islame, art. Chine.

(101) Forsyth; Report, p. 17.

これがタンガン名の初の初見であらう。

(101) D'Ollone; Recherches, p. 284—293.

(102) Thiersant; Mahométisme, p. 234. note. (1)

(102) D'Ollone; ibid. p. 276, 317,

Encyclopédie de l'Islame, art. Chine.

(103) D'Ollone; ibid. p. 276. note.

(104) 十一朝東華錄、咸豐十一年三月丙辰。

同 九月丁酉。

(108) 辛卯侍行記卷四、循化縣條。

(109) D'Ollone; *ibid.* p. 298—305.

(110) *ibid.* p. 273—4.

(111) *Encyclopédie de l'Islame*, art. Chine.

(112) D'Ollone; *ibid.* pp. 274—5.

(113) Thiersant; *Mahométisme*, p. 163.

(114) 矢野博士、近代支那史・四四九頁等。

Thiersant; *ibid.* p. 206.

昭和十七年八月十六日稿

〔補遺〕

餘白を借りて二事を補つておきたい。

* (参照一五頁) Henri Massé; *Le Islam*, p. 201 に據れば、「サーファヴィイ家はカスピ海地方で人々に惜しまれながら死んだ或隱者を祖とする。彼はその世系をアーリドの第七代教主に基け、従つてアラビア出身と稱したのであるが、その

孫に至つて甫めてシーヤ派教徒なりと宣言した。……十五世紀の初め、サーファヴィイ家は一教團を創設し、波斯のみならず小アジアにも宣傳した。その間から王となる者さへ現れ、爲に歐人が目して波斯の『大スーフィ』となすのは外ならぬ(右の教團に屬する)スーフィである。」と、云ふ。一四九〇年にイスマイルが立つて王朝の基礎を置いたのは、かかる方法に由つて獲得した黨與の勢力を利用したことであつた。此の先例が和卓の野心に對して無關係であつたとは到底想像出來ないであらう。

** (参照二八頁) Hughes; *Dictionary of Islam*, art. Fagir には、印度西北境のスンニ派教徒なるマウラヴィヤ派信徒はカドリヤ教團に歸屬してゐると述べてゐる。新教に於けるカドリヤとマウラヴィヤの混合が必ずしも異例とするに足らぬことを知り得よう。